

2013年1月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

苦難を越えて

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「勸持品」

1. 勸持品の概要

- (1) 薬王菩薩たちが、仏の滅後に妙法蓮華経を説き広めますと誓願します。
- (2) 五百人の阿羅漢（五百弟子受記品で授記された阿羅漢たち）が、別の国土で妙法蓮華経を説き広めると誓願します。
- (3) 学・無学の八千人（授学・無学人記品で授記された仏弟子たち）が、さらに別の国土で妙法蓮華経を説き広めると誓願します。
- (4) 摩訶波闍波提（まかはじゃはだい）、耶輸陀羅（やしゅたら）と、二人と共に修行している女性の出家修行者たちが授記され、自分たちも教えを説きひろめると誓願します。
- (5) 八十万億那由多の菩薩たちが、釈迦牟尼世尊に、妙法蓮華経を説き広める誓願を、詳しく申し上げます。

2. 菩薩の弘教の誓いへのプロセス

(1) 釈迦牟尼世尊の呼びかけ

見宝塔品で、釈迦牟尼世尊が次のように、弟子たちに呼びかけています。

「もろもろの弟子たちよ。だれがこの教えをよく護ってくれますか。いまこそ大願を起こして、この教えを未来永劫にのこしてほしいものです。もしこの法華経の教えをよく護ることのできる人があったならば、それがそのまま、わたしと多宝如来を供養することになるのです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.117）

(2) 悪人成仏

提婆達多品で釈迦牟尼世尊は悪人成仏を説いて「すべての人間は平等に仏性をもっている」ことを示し、菩薩たちは深い感銘を覚えました。

(3) 菩薩たちの誓い

勸持品で菩薩たちは、教えを理解しない人々に妨害されようとも、妙法蓮華経をいのちをかけて守護し、実践し、説き広めると力強く誓願します。

「勸持」とは、「受持を勧める」という意味です。

「勸持品」では、菩薩たちが、自分の決意を述べています。人に勧めるためには、まず自分に固い決意が出来ていること、自分が実践していることが必要だからだと考えられます。

3. 力に応じて弘教する

(1) 弘教の誓いを立てた人々

この品では、四通りの人々が、弘教の誓いを立てています。

- ・薬王菩薩を初めとする菩薩たち。
- ・五百人の阿羅漢たち。
- ・八千人の学・無学の人たち。
- ・摩訶波闍波提、耶輸陀羅を初めとする女性の修行者たち。

(2) それぞれに誓いを立てた意味

それぞれの人たちは、自分の条件に合ったところ、自分の力に合ったところで、全力を尽くすことを誓っています。

背伸びをしない。できる限りのことをする。そのように言っていると見ることができます。

(3) 娑婆世界の弘教

娑婆世界を対象にして弘教する人は、十分な力を持ち、しっかりした心構えができていることが求められます。それゆえ、娑婆世界に対する弘教を担当するのは、菩薩になります。

4. 娑婆世界

娑婆世界は、もっとも厳しい世界であることが八千人の学・無学の人たちの言葉として語られています。それは、次のような性質を持った人が多いからです。

(『訓訳妙法蓮華経并開結 立正佼成会』p. 236)

- ・人弊悪多く : 人々の心がひじょうに悪い。真理が見えない。智慧が無い。
- ・増上慢を懐く : 増上慢の気持ちが強い。自分を高しとして人々を見下す。
- ・功德浅薄 : 徳をもって人をしあわせにすることが実に少ない。
- ・瞋(しん) : 意のままにならないときに発する自分本位の怒り。
- ・濁(じょく) : 心が濁っている。きれいなものも汚く見える。ものごとが歪んで見える。
- ・諂(てん) : へつらう。人の目ばかり気にしている。人に悪く見られたくない、人に良く見られたいと世間体ばかりを気につけ、姑息な態度を取る。
- ・曲(こく) : こじつける。自分の誤りを認めない。間違いを正しいと言い張る。
- ・心不実 : 不正直である。都合の悪いことを隠し通す。人の手柄を自分の手柄にする。

5. 義母と妻への授記

(1) 摩訶波闍波提

釈迦牟尼世尊の父は浄飯王（じょうぼんのう）、産みの母は摩訶麻耶夫人（まかまーやーぶにん）です。摩訶麻耶夫人は、悉達多（釈迦牟尼世尊の本名は瞿曇悉達多（ごうたま・しっだーるた））を出産してまもなく亡くなりました。

産みの母の妹である摩訶波闍波提が浄飯王の後添えとなり、悉達多を養育しました。

浄飯王が亡くなった後、出家して、釈迦牟尼世尊の弟子となりました。

(2) 耶輸陀羅

釈迦牟尼世尊の夫人。二人の間に羅睺羅（らごら）が誕生したのち、夫の悉達多太子が出家したので、一人で義父母に仕えながら、羅睺羅を養育しました。その羅睺羅も早くに出家して釈迦牟尼世尊の弟子となりました。

義父浄飯王が亡くなった後、摩訶波闍波提と共に出家し、釈迦牟尼世尊の弟子となりました。

(3) 女性の修行者たち

摩訶波闍波提と耶輸陀羅が出家したとき、女性の教団ができました。二人は、女性教団の優れた指導者であったことが、伝えられています。

摩訶波闍波提と耶輸陀羅が授記される時、一緒に大勢の比丘尼（女性の修行者）たちが授記されています。

6. 義母と妻への授記が最後になった意味

摩訶波闍波提と耶輸陀羅が八歳の龍女よりも遅れて授記された理由について、庭野日敬師は、次のように解説しています。

(1) 身近な人の教化は難しいことを形で示した

指導者とごく身近なあいだにあらる人は、肉親としての感情がわざわざいして、かえって法の受け入れがスムーズにいかないことが、一般的にはおおいにありうるのです。

そのようなことを教えるために、わざと授記を遅らせたものと解することができます。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 132~133）

(2) 白紙の心で法を受け取る

「教えを正しく伝えるかぎり、だれが伝えようと問題ではない。また、それを素直に受け取るかぎり、教育や教養のあるなしは問題ではない。みんな仏の悟りを得られるのだ。」ということが、教えられています。（中略）白紙の心で教えを素直に受け取れば、それで救われるのだということです。（同p. 133）

7. 勸持品二十行の偈（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 135~136）

(1) お経を敬う

わたくしどもは、仏さまを心から敬っておりますから、仏さまが最高の教えであるとお説きになるこのお経を、仏さまとおなじように敬います。

(2) 忍辱

それゆえに、この法華経を守り、説きひろめるためには、外部から加えられるもろもろの迫害や困難をじっと忍びます。

(3) 我身命を愛せず

わたくしどもは、命など惜しいとはおもいません。ただ、この無上の教えに触れない人がひとりでもいることが、なにより惜しいのでございます。

(4) 三類の強敵

世間の一般大衆の無理解からくる軽蔑も、他の宗派の専門家たちの敵意からくる迫害も、高い地位をかさに着てこの教えを意識的に無視したりおしつぶそうとしたりする人の力をも、すべておそれはばかることなく、どんなところへでもいってこの法を説きましょう。

(5) 世尊の使い

わたくしどもは、まさしく世尊の使いでございます。誓って全力をつくし、正しく法を説きひろめます。仏さま、どうぞ心安らかにおぼしめしてくださいませ。

8. 三類の強敵（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 137~139）

(1) 俗衆増上慢（ぞくしゅぞうじょうまん）

《法華経》を読んだこともなく、内容もほとんど知らないくせに、それを独善的な教えだと非難したり、その信者を軽蔑したりする一般大衆です。

（中略）

あくまでも法華経の本義にのっかって、おだやかさのなかに芯のつよさのこもった、信仰者らしい態度でそれを説かねばならないのであります。

(2) 道門増上慢（どうもんぞうじょうまん）

他宗教・他宗派の人たちが、あたまから敵意をもって、法華経の真意を理解しようとしぬ態度です。

（中略）

（われわれは）どこまでも忍辱の態度をもって、そのような人たちが宗教の本義にめざめるように、粘りづよい努力をつづけねばならないのです。

(3) 僭聖増上慢 (せんしょうぞうじょうまん)

宗教界・学会において高い地位にあり、世の尊敬を受けている人が、その状態に陶醉し、あるいはその地位を守ろうとして、正しい教えをないがしろにすることです。

(中略)

われわれは、なにもまっこうからそういう増上慢に対抗する必要はなく、自分の信ずる真実の教えを、あくまでも正道を踏んで広宣流布していけばいいのです。真実の教えは不滅だからです。

9. 不惜身命 (ふしゃくしんみょう)

(1) 不惜身命

- ① 勸持品に「我身命を愛せず 但無上道を惜しむ」という経文があります。ここから「不惜身命」という言葉が生まれました。
- ② 「愛」は「執着する」という意味ですから、「愛せず」は執着しないということです。
- ③ 「無上道を惜しむ」とは、「無上道に到達しないことを惜しいと思う」ということです。人々が無上道に目を向けず、無上道に向かわないことを惜しいと言っているのです。
- ④ 「不惜身命」は、人々の間に理想が実現していないことを惜しいと思い、理想を実現するためには我が身に執着せず、我が命にも執着しないで努力をするという気持ちを表した言葉です。

(2) 現代の不惜身命 (庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 139~140)

現代においては、「不惜身命」は次のように解するのが良いと考えられます。

- ・価値あることのために、自分の時間や、自分の労力を使うのなら、少しも惜しくない。
- ・自分が真理を歩む姿、真理を人々に勧める姿を世間の人々が見て、どんなことを言おうと、はばかりすることもなければ、恐れることもない。

10. 忍辱

(1) 忍辱とは

忍辱という行は、自分に悪事をしかけられたときに、相手を大きな心で受け止め、真理にしたがって対応することです。その根底には、寛容の精神が流れています。

(2) 法華経の弘教を支える忍辱行

妙法蓮華経では、法師品第十から従地涌出品第十五までに説かれる弘教の教えが、忍辱行に貫かれています。娑婆世界における妙法蓮華経の実践と弘教は、忍辱行に支えられているのです。

(3) 真の人間として生きるために

地獄(わがままな怒りの心)・餓鬼(歪んだ欲望の心)・畜生(理を知らなかったり無視する心)・修羅(威張ったり責めたりする心)に墮すことなく、真の人間として生きるためには、忍辱行は必須の修行であると考えられます。